

## 紙 鳶 遊 び

少年時代の遊戯と云うと、竹馬とか、竹反し(注1)とか、独楽まわしとか、針打ち(注2)とかなどいろいろの遊びがあったが、先ず僕などが一等面白いと思って盛んに弄んだのは紙鳶であった。

歳の暮から新年へ掛けてなかなか盛んに紙鳶を揚げたものだ。勿論当節とは時世が違って、我々が少年時代には電信線だの電話線などがすくなかったから、市中で揚げても其筋からやかましく云われるようなことが無かったからでもあろうが、当時では東京では殆んど凧揚げは絶えて仕舞ったようなものだ。

尤も紙鳶にもいろいろ種類があって、ブカ凧、奴凧、鳥凧、扇凧、鯨凧などいろいろがあるが、これは各々形によって名けられたもので、これは格別弄んでも面白くもないものだ。

滑稽なものに三番凧というのがある。これは目玉が金に変わったり銀に変わったりする、また風のまにまに舌がペラペラ動いて余程奇態なものだ。

千住凧(注3)というのがある、これは尾が付いていて、空へ揚がっても、凝乎と動かずに澄んでいて、格別面白味も無いものだが、今でも殆んどそれは可なり行われている。

一等面白いのは以上の種類のものではない。尾も何にも付けぬ長方形のもので、此処に製り方を云うと、先ず大きさには半枚凧(西の内(注4))一枚、二枚、二枚半、それからずっと大きいものになると、六枚、九枚などというのがあるが、就中最も弄んで好いのは二枚、二枚半位のだ。

骨の組み方にもいろいろあって、丁寧にすると巻骨、障子骨などいろいろがあるが、先ず縦が一本、横四本、斜めに二本というのが普通だが、或いはこれに縦が二本増すのがある。また、縦が一本、横が三本、斜めに二本というものもある。然しこれに限って「龍」の字を丸く書いてある。越後大名の堀の家中之ものが此式のを揚げるので、「堀籠」(注5)という名を負うていた。どんな烈風でも尾を付けない。

これらの凧は糸目の加減で、右へでも左へでも自由自在に傾ぐようにすることが出来る。即ち凧を我が意の如く使うことが出来る。だから尾の付いている凧などは、下から其尾を払って落としてやったりする。

又友達同志でも若しくは知らぬ人同志でも、凧の喧嘩をさせる。或いは糸を絡めて切り合いをしたり、或いは凧を巧みに使用して糸でもって敵の凧を負傷させたりする。或いは糸に「ガンギ」(注6) というものを付けて他の凧の糸と切り合いをすることもある。

然し此の中で最も面白いのは、互いに顔の見えないほどの距離を保ち、同じほどの糸の長さで凧と凧とすくい合いをすることだ。これには余程の巧拙があるので、うまくいくと敵の凧を顛覆して落として仕舞うことが出来る。それがまた上手同志でやると、凧と凧とが一つに重なり合って仕舞って落ちることがある。これを「めっちゃ」というが、角力でいうと同様に落ちたといったようなわけで、これは無論無勝負で、仕掛けた方が位勝とでもいうのだ。

前に云う通り時世の変遷で凧の遊びも非常に興味を殺がれて仕舞ったが、僕などより年を取っていた奴等が紙鳶の悪戯はまだまだこれ位のことばかりではない。大凧で余所の家の鬼瓦などを落としたり、糸目を「両かしぎ」(注7) というにして梅の蕾などを払い落したりする位の悪戯は朝飯前のことだった。或る時は余所の娘が盛装して往来を行くと、その娘の美しい簪を巧みにすくい取ることもあった。又そういう場合に、やり損じて娘の耳を糸で引き搔き、とんだ怪我をさせて、親に怒鳴り込まれるなどという珍談もあったものだ。

「猿」(注8) というものを作って、よく揚がっている凧の糸をつたわらせてあげると、それが高く上がる。さて、それを糸のコキウでトンと言わせるとサルがハラリと解けると中からいろいろの小さく切った色紙が、丁度花でも散るようにひらひらと舞い落ちる、そういう事も出来る。これもなかなか綺麗な遊びだ。

この外にまだ時節ちがいに「すが凧」(注9) というのがある。暖かくなってから揚げる凧だ。これは小さくて繊巧なもので、糸目などは「すが糸」で付ける。骨は非常に細い竹で、極くたまには鯨(注10)もある。これは多く春過ぎに揚げる凧でいかにも綺麗に作ってあるので、ボッチャン的貴族的のものだ。弄んでも余り面白いほどのものではないが、好い風情のものだ。今は知って居る子も少なくなかった。昔は凧絵凧字と云って、書画共一種変わった風があったが、現今では拙劣極まる木版刷になって仕舞って殆んど見るに堪えない。又紙も粗悪になって、「西の内」などで張ったものは絶えて無いようだ。ましてこういうような遊びをする少年も無くなって仕舞ったようだが、これも時勢の変遷で致し方のない事だ。その代わりおもしろい遊びが沢山出来たようだ。(神谷鶴伴(注11)による筆記)

注1. 竹返し：

竹返し（または竹返し）と言う昔遊びは、スティック状に切断した竹（幅2~3cm、長さ15~20cm程度）の板を複数枚用意し、手のひらや手の甲などを使い、手先やバランス感覚を保ちながら芸や技を繰り出す遊びを言う。裏表の状態を把握しつつ、その状態を手の甲で操ったり、対戦する場合はあらかじめルールを決めておき、技が完成するスピードを競ったりする。

細かなルールは地域差があるが、例えば「すべてを表か裏に統一して落としていく」「竹べらに数字などを書き込み、その順番に落としていく」「竹べら数本を握り空中で一回転させて、すべてをつかみ直す」などの例がある。

注2. 針打ち：

紙打ちともいう正月の児童の遊びの一。糸のついた針を前歯でくわえて重ねた紙に吹き立て、糸を引き上げて針についてくる紙を自分のものとするもの。

注3. 千住凧：

千住凧について、はっきり既述した資料は見つかっていないが、以前、千住には、折りたたみ式の角凧を専門とする凧屋があり、飴色に研がれた骨は「千住骨」と呼ばれていたとのこと（伊地知英信さん作の2011年秋に東京晴海で開催された日本の凧の会全国大会で配布された資料による）なので、「千住骨」を使用した角凧を「千住凧」というのではないかと中川は推測している。

注4. 西の内：

質はやや粗いが、非常に丈夫な手漉きの楮（こうぞ）紙。もと茨城県常陸大宮市西野内で産し、明治時代、選挙の投票用紙や印鑑証明用紙に指定され、全国的に有名になった。和紙は産地により、サイズにより大きさに差があるが、凧の大きさを表すのに西の内六枚などと「西の内」も大きさの基準として使用される。

注5. 堀籠：

両国の釣金（釣竿屋の金さん）作の喧嘩凧には龍という字が二重になって書かれていた。

注6. ガンギ：

凧合戦で、相手の凧を落とすために用いられる小さい鎌のような道具で、揚げ糸に取り付けられる。

注7. 両かしぎ：

糸目のつけ方の一つで、両かしぎというのは、左右へかしぐようにつける糸目で、凧合戦ではこの糸目にして、すでに揚がっている合戦相手の凧に傾いで近づいていき、合戦相手の凧糸を切るようにするものと思われる。

注8. 猿：

凧を揚げたときその揚げ糸に吊ると風を受けて揚げ糸に沿ってあたか

も猿のごとくにスルスルと昇っていく仕掛けで、糸昇りとも呼ばれている。

構造や形状にいろいろあり、傘状のものでは、揚げ糸の終点（ストッパー）に達すると、傘を閉じて一転して揚げ糸を下り、手元に戻ってくる。また、その折に仕掛けが動作して宣伝文やキャンディなどを散布させたりする。

沖縄県では蝶形のものが多く、ストッパーの所で羽を閉じて手元に戻ってくる。

沖縄本島では「猿」の意味の「フータン」と呼び、「風弾」という字を当てており、八重山地方では「シャクシメー」と呼んでいる。

注9. すが凧とすが糸：

すが凧は精巧な小さな凧で、すが凧を揚げる時には「すが糸」と呼ばれる撚りのかかっている1本の生糸を使用する。すが糸は、人形の髪などにも使用される。

注10. 鯨：

ここで鯨と呼ばれているものは鯨筋（げいきん）の事と思われる。

鯨筋は、以前はテニスのラケットにガットとして使われていた。

鯨の髭と思われていたことが多いが、実際には、ガットも鯨の脳の繊維を取り出し洗って乾燥させ寄り合わせて作られたもののようで、すが凧の骨として使う鯨筋の太さもいろいろなものが利用できたと思われる。

注11：神谷鶴伴：

幸田露伴の弟子の小説家。